

表現者のリスクーアイ・ウェイウェイの場合

埼玉大学人文社会科学研究所（学際系） 牧 陽一

アイ・ウェイウェイと中国政府との対立は08年四川汶川大地震の調査から始まる。09年国内のSNSは封鎖され、監視尾行がつく。アイの名前はネット上から消され、全てのメディアの敏感詞（禁止名）になる。同年アイは成都警察の襲撃を受けて右頭部内出血の負傷。10年1億円以上かかったアイの上海アトリエは解体される。11年4月3日、ついにアイは行方不明になる。23日に解放。税務当局は未払い税金と追徴金2億4千万円の請求書をアイに送る。3万人の支持者から1億8000万円が集まる。13年獄中の模様を描いた「傻伯夷」をYouTubeに発表。14年4月上海の美術展、さらに5月北京での美術展でもアイの名前が消される。

15年6月6日から北京4か所で初めての個展が開催される。6月22日4年前に投獄されていた場所を発見したと、インスタグラムに写真とビデオを公表。7月22日午後3時ごろ「パスポートを取り返した」とアイとパスポートの写真が映し出された。

アイは、イギリスに6カ月のビザを申請したが、わずか20日のビザしか発給しなかった。後に謝罪。LEGO社に大量のブロックを注文したが、提供を断られた。後に規約を変更。

16年難民救済の活動と作品制作のためにレスボス島、ガザ地区などで活動。8月銀川ビエンナーレ（寧夏回族自治区）の参加者から削除される。これらは全て自らのツイッター、インスタグラムで公表していった。

アイの作品はミニマルだが、内部に混沌が隠されているという。その混沌とは作品が常に社会問題を問い続けているという事だろう。16年銀川ビエンナーレの作品は、艾のニューヨーク時代の作品がモチーフになっている。それは、マルセル・デュシャンの横顔を針金のハンガーでつくったものだったが、それを美術館前に巨大化し、四川汶川大地震の現場で集めた鉄筋でつくる予定だった。

38tの鉄筋を伸ばして並べた「Straight(2008-12)」も地震跡から回収したものだ。通学鞆のシリーズも地震犠牲者への追悼の意味を持つ。

11年の「ひと周りの獣」は政府が奨励する十二支奪回愛国運動への批判が込められている。また「永久・自転車」2013は司法の不在を明らかにした楊佳事件を思い起こさせる。「粉ミルクの国」2013は08年の中国メラミン入り毒ミルク事件を想起させる。「陶器のスイカのシリーズ」2006も農村の貧困、売血によるエイズの蔓延、患者の血を注射した西瓜騒動を背後にもつ。

地震調査、難民援助など行動の中からモチーフを抽出して表現へと昇華し、行動の痕跡も作品に落とし込んでいる。こうした表現は自身の経験や思考と結びついている。

だが64天安門事件をテーマにした作品は見当たらない。それはアイが1981-1993年アメ

リカにいたからだが、行動しなかったわけではなく、ニューヨークでは国連ビルで抗議デモを行っている。

天安門事件との関りが表現者には最もリスクの大きいことだと考えられる。